

投稿

歯磨きの起源が判明か

稲葉修

広栄社
つまようじ資料館管理人

現在の人類とは異なる種であるネアンデルタール人が、鎮痛効果のあるサリチル酸を多く含むポプラの木を噛み、抗生物質のペニシリンをカビから採取していたとオーストラリア・アデレード大学などの研究グループが明らかにした(『Nature』3月8日)。

の歯の化石に縦に筋が入っているのを調べたアリゾナ州立大学のクリスティ・ターナー教授(考古学)の論文が掲載されていた。縦の筋は、彼らが楊枝を使っていた証拠だとされ、ターナー教授は「おそらく斧よりも先に使ったのだろう」と推測していた。

スペインの洞窟で発見された5人のネアンデルタール人の歯に付着した歯石に含まれるDNAを分析したところ、スペインのエルシドロン洞窟から見つかった若い男性の歯石からポプラやアオカビ

野生に近い生活をしていた彼らにとって、文字通り「歯は命」であったと言え、木の皮や棒切れを噛む習慣が極めて古くからのもので

ネアンデルタール人の楊枝

の仲間に含まれる成分が検出された。このうち、ポプラの検出は、人類が古くから楊枝を使っていたと示唆するものだと見える。

あり、これが楊枝(歯木)や歯ブラシの始まりだったのではないかと推察される。

今から27年前、イギリスの歯科専門誌『The Provel』(1990年1月号)には、ネアンデルタール人

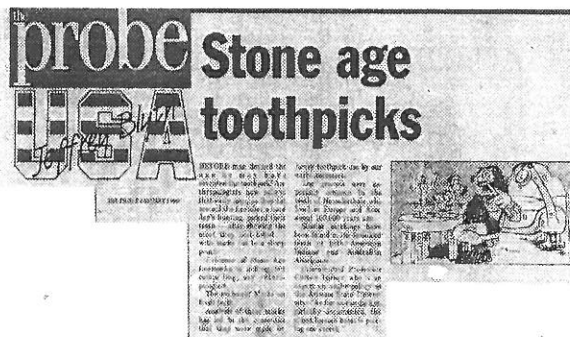
東洋における歯ブラシと楊枝を使う習慣の起源は、インドにあつたとされる。お釈迦さまが弟子たちに木の枝の端を噛んで房状にしてそれで歯を磨くように教えたところがある。お釈迦さまが使った木の枝を投げ捨てる時、たちまち芽が出

木の枝で歯を磨く習慣が中国に広まった。奈良時代には、仏教の勉強にきた日本のお坊さんが多くの先進文化を日本に持ち帰り、その中に楊枝を使う習慣も含まれていた。

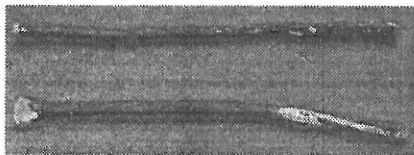
お加持の大法要である。平安時代、三十三間堂を創建した後白河天皇が紀州の熊野詣の際に頭痛を覚え、地元の人に差し出された楊枝を噛んだところ頭痛が癒えたという故事にちなんでいる。

アユルヴェエダという古代インドの伝承医学の中に歯木が出てくる。この医学が確立されたのは紀元前2千年から3千年ごろと言わ

楊枝の鎮痛効果に注目したのはドイツ人。1820年代に楊の木からサリシンという物質が抽出された。1899年にバイエル社がサリシンから作ったのがアセチルサルチル酸、薬品名でいうアスピリンである(大塚泰男『東西生薬考』)。後白河天皇の頭痛が癒えたのは単なる伝説ではなく、アスピリンの鎮痛効果だったのだ。この故事を題材にした「三十三間堂棟木の由来」という浄瑠璃や歌舞伎も残っている。ちなみに、三十三間堂のご本尊は千手観音だが、17番目の左手にあるのは楊枝である。



英国の歯科専門誌に掲載されたネアンデルタール人に関する記述



歯木の種類「ニーム」



唐招提寺の楊柳観音の左手17番目

5世紀に中国の法顕(ほっけん)というお坊さんは、仏典を求めてインドへ苦行して行った。インドの人々が木の枝で歯を磨いている光景に驚いたと、旅行記『仏国記』に書いている。7世紀には玄奘(げんじょう)、義浄(ぎじょう)もインドへ行き、同じように歯磨きの習慣を『大唐西域記』、『南海寄帰内法伝』に書いた。

京都の三十三間堂では、毎年1月15日に近い日曜日に成人を迎えた男女が弓を射る「通し矢」が行われる。この日の主たる行事は実は「楊枝の

